

青森県岩木川下流域におけるサルケ（泥炭）の利用（2）

増田公寧¹⁾

Field Studies on Usage of Peat in the Lower Valley of Iwakigawa-River,
Tsugaru District, Aomori Prefecture, Japan(2)

Kimiyasu MASUTA

Key Words：泥炭, 亜炭, 低湿地, 開拓

1 はじめに

津軽地方の岩木川下流域一帯では、古くから「サルケ」²⁾が利用されてきた。サルケとは、分解が不完全な植物の遺体が堆積したもので、泥炭に相当する³⁾。筆者はこれまで、青森県津軽地方、下北地方、および上北地方における、庶民によるサルケの利用について調べ、報告した(拙稿2015、2016、2017)⁴⁾。本稿はその続編であり、津軽地方をふたたび対象としたものである。

前回は津軽地方岩木川下流域の広範囲にわたって全体像をさぐることに力点を置いたことから、地域間の差異や共通性を垣間見ることができたが、個々の地域について深く掘り下げることができなかった⁵⁾。そこで今回は対象地を絞り、地域的な特徴を見いだすことを目標のひとつにした。対象としたのは(1) つがる市木造柴田字柴田・菊川集落、(2) つがる市木造丸山・出来島集落である。いずれもサルケの商業的な利用という点に独自性が予想される地域である。調査は、筆者が対象地の居住者宅を訪問し話を伺うという方法でおこなった。なお、1事例⁶⁾を除くすべての聞き取りは私的におこなった(2017年6月18日、7月20日、8月20日、9月3日、11月28日に実施)。

2 概況

この地域は、かつて古十三湖と呼ばれる大きな潟湖が広がっていた場所で、亀ヶ岡遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡は当時の湖岸近くに点在している。約7000年前ころをピークに次第に湖水が退き⁷⁾、湖は原野に変わっていった。岩木川下流域にひろがるこの広大な原野が、弘前藩の直轄事業として本格的に開発され始めるのは17世紀後半になってからである⁸⁾。原野のただなかに開かれたムラに暮らす人々にとって、燃料の確保は切実な問題であり、当時からサルケが利用されていたものと考えられる。

庶民によるサルケの利用に言及する文献が現れるのは、18世紀半ば以降である。『津軽見聞記』(宝暦8年, 1758)には、「さるこ」と呼ばれるものが薪の代用品として使用されていたことが記される⁹⁾。『広須組三新田農術覚書』(安永2年, 1773)では、「さるけ地」の畦の深浅によって稲の生育に影響のあることが記されている¹⁰⁾。『そとが浜風』(天明5, 1785年の条)には、「サルケ」や「ヤチワタ」と呼ばれる「木のくちたるごときもの」が火にくべられていたことが記され¹¹⁾、同書の著者は別の著作のなかで出羽、越後、三河、尾張、伊賀などにも「津軽の猿毛」と同様のものが産出すると述べている¹²⁾。『奥民図彙』(天明～寛政年間, 1781～1801)には、「サルケ」を掘り起こして乾燥させ、火を付けてその灰を肥料とする農法があったことが記される¹³⁾。『東奥沿海日誌』(嘉永3年, 1850)には、出来島、車力、七里長浜の人家のない浜辺などで「ガシ」(泥炭)を燃やしていたことが記される¹⁴⁾。これらの書物からは、少なくとも数百年の昔から、この地域のひとびとが「サルケ」を有用なものとしてとらえ、暮らしの中に取り入れていたことを推し量ることができる。

近代以降も、この地域ではサルケが燃料として用いられた。そのことに触れる書物は多い。たとえば明治初期に編纂された『新撰陸奥国誌』(1876)では「大川に沿ふ村々は薪炭乏しく細民はサルケを以て薪に替ふ」と記される¹⁵⁾。具体的な利用の実態については、弘前大学の学生による『こまおどり』(1984)、青森県立郷土館による『再賀の民俗』(1998)をはじめ、県による『青森県史叢書 岩木川流域の民俗』(2008)、『青森県史 民俗編 資料津軽』(2014)で触れられている。『五所川原市史』では「史料編1」(1993)および「通史編2」(1998)のなかで、同市長富地区での事例が紹介されている¹⁶⁾。また、野本寛一氏による「平地水田地帯の民俗—津軽の『サルケ』を緒として」(2005)は、実地での聞き取りをもとに、サルケの利用をとりまくひとびとの生活のありようを描き出している¹⁷⁾。

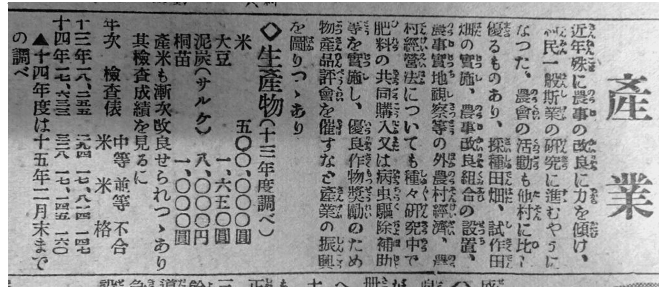


サルケ

1) 青森県立郷土館学芸主査 青森市本町二丁目8-14

・柴田(しばた)

柴田(つがる市木造)は津軽平野の南方に位置している。明治22(1889)年に柴田村、中館村、菊川村、千代田村、福原村の5か村が合併して柴田村になったときに村役場が置かれた。柴田地区で今回お話を伺うことができた最年長の方は、大正14(1925)年に生まれている(柴田③)。大正15(1926)年の地元紙『東奥日報』によると¹⁸⁾当時の人口は2460名。戸数は416戸(大正14年)。田720町、畑88町、原野81町。荷馬車80台、自転車106台(大正15年)であった。当時の農村には珍しく図書館(小学校に併設された私設図書館)があり、地域の青少年の健全育成にとって大いに有益であると紙は報じる。主な生産物(価格)は米(50万円)、ついでサルケ(8,000円)、大豆(1,650円)、桐苗(1,000円)の順で、サルケの生産は主要な産業のひとつであった(写真右上)。



柴田村の産業『東奥日報』大正15年3月22日 東奥日報社提供

この地域から産出する泥炭は古くから「柴田サルケ」として評判が高く、『青森県総覧』(1928)に「(柴田村では)西郡新田地方名産の泥炭年額八千円の産出あり」と記され¹⁹⁾、『津軽口碑集』(1929)に「西津軽郡柴田村に産するもの尤佳なり、故に『柴田さるけ』の名あり」と記される²⁰⁾。また、当地には次のような伝説が伝わる。「むかしむかし、弘法大師が諸国を遍歴して木造町柴田集落にきた。折から雪降り積もる冬のさなかであった。みすぼらしい家を訪ねて一夜の宿を乞うたところ、その家のあるじは快く泊めてくれた。しかしこの寒さの中で、炉に焚くものもない有様を見て、大師は直ちに焚きものを持って来て、与えてくれた。これがサルケであった。サルケの中でも柴田サルケといえ、質がよいといって評判なのは、弘法大師が授けてくれたものだからという。」²¹⁾

・菊川(きくかわ)

菊川(つがる市木造)は柴田の北隣に位置している。『新撰陸奥国誌』(1876)には「平衍(へいえん)の地水田の際にあり家数二十五軒」と記される²²⁾。明治22(1889)年の合併により柴田村の大字となり、昭和30年から木造町となった。明治時代の主な物産は米や大豆であった²³⁾。

明治45(1912)年の地元紙『東奥日報』²⁴⁾に、西津軽郡柴田村大字菊川の青年団による泥炭(サルケ)採掘活動が取り上げられている(写真下)。同紙によると、9月から3月までの半年間、一週間のうち3日をわら工品の共同製作、3日を学習、1日を精神講話の聴講にあて、模範的な生活を送っているという。サルケの採掘は共同作業の一環



菊川青年団の活躍『東奥日報』明治45年7月9日 東奥日報社提供

で、「此の地特に品質良好の泥炭を産し他方より来り購買するもの多きゆゑ」におこなっていると記される。3年をローテーションとし、地主から借りた土地で1年目にサルケの採掘、2年目から稲作をおこない、3年の期間が終われば地主に水田として返却するというならわしである。青年団、地主とも一挙両得であり、サルケの採掘が開墾(開田)を兼ねるという意味では作業的にも一石二鳥であった。サルケの採掘と開拓をはじめ、農作業やわら工などの共同作業は団員間の紐帯を強め、ムラの青少年の健全育成にとって有益な活動であったようだ。同記事は、菊川地区の若者は夜遊びをすること者もなく、模範的な生活を送っていると報じている。

・出来島(できしま)

七里長浜に面した日本海沿岸に位置している。文禄元年に斎藤久四郎、長内金右衛門、長内金三郎により、石沢川の排水路として付近一帯が開拓されたときに開かれた村で、当初は現在より南西方向の海沿いにあった²⁵⁾。嘉永3年の『東奥沿海日誌』には「人家三十軒斗、畑、田有。樹木少し。故にガシを薪の代りに用ゆ」²⁶⁾と記される。ガシとは、サルケ(泥炭)と同様のものである²⁷⁾。明治元年の『新撰陸奥国誌』では、「村家海際にあり田畑耕耘の余暇に漁を業となすのみ他の産なし(中略)家数は三十九軒」と記され²⁸⁾、農耕と漁労の複合経営地域であった。当地はまたサルケの産地としても知られた。昭和21年の地元紙『陸奥新報』に、闇米の運搬にサルケが利用され、七里長浜で取引されたことが記されている(次頁写真)²⁹⁾。「サルケと婦人 由断がならぬ——サルケ(泥炭)の中に米を隠す方法が流行っている、新田地帯は薪が不足なためサルケを薪代用にたいしているがこれを利用してサルケを荷車に積む前に闇米六俵ほどを下の方に積む、その上に泥炭を積み重ねる、これらの荷馬車で運ばれる米は多く七里長浜

の海岸取引だ、全くヤミ（泥炭）米サ」。最後の「ヤミ（泥炭）」という表現は、泥炭の黒いイメージを闇取引に重ね合わせたのだろう。往時は、出来島に点在するヌマからサルケが切り出され、馬車に積まれて近隣町村へ販売・運送された（出来島②）。出来島ではサルケを積んだ馬車が往来することは、ごく自然な光景だった。そのなかには、サルケとともに闇米を運搬していたものもあったというエピソードだ。明治22年に鳴沢村、昭和30年に木造町となった。

サルケ（泥炭）の中に米を隠す方法が流行っている、新田地帯は薪が不足のためサルケを薪代用にたいこいるがこれを利用してサルケを荷車に積み前に闇米約六俵ほどを下の方に積み、その上に泥炭を積み重ねる、これらの荷馬車で運ばれる米は多く七里長濱の海岸取引だ、全くヤミ（泥炭）米サ

サルケと婦人
由断がならぬ

闇米とサルケ（『陸奥新報』昭和21年12月19日）
陸奥新報社提供

・丸山(まるやま)

17世紀後半に開村された竹鼻村が、18世紀前半に丸山村と改称され、明治22年に越水村、昭和30年木造町の大字となった。今回の聞き取りは、丸山の中心部である竹鼻地区を対象にした。通称「丸山の殿様」と呼ばれる工藤勇雄家には広須・木造新田の開発にかかわる史料が伝わり、初代は17世紀初頭に牛潟に移住して開発をはじめたことや、二代目弥三兵衛が竹鼻村を含む新田を開発した経緯が記される³⁰⁾。『新撰陸奥国誌』には、「家数二十軒山を西にし三方水田あり畑少し」と記され³¹⁾、明治期の主要な物産は米と大豆であった³²⁾。出来島（前項）や丸山の集落は、柴田集落や菊川集落などのある沖積平野より少し高い場所（段丘上）に位置している。この段丘（山田野段丘）の上を火山灰と砂が覆うかたちで南北30kmにわたりひろがる屏風山砂丘上の一部は「沼地や湿地を多く含み、この地方で『さるけ』と呼ばれる厚さ2～3mの泥炭層が存在」している³³⁾。かつて出来島や丸山では、沖積平野ではなく段丘上に分布する沼地や湿地からサルケを採取していた。現在は稲作を主として、段丘上には畑がひろがり、スイカ・メロンの栽培が盛んである³⁴⁾。

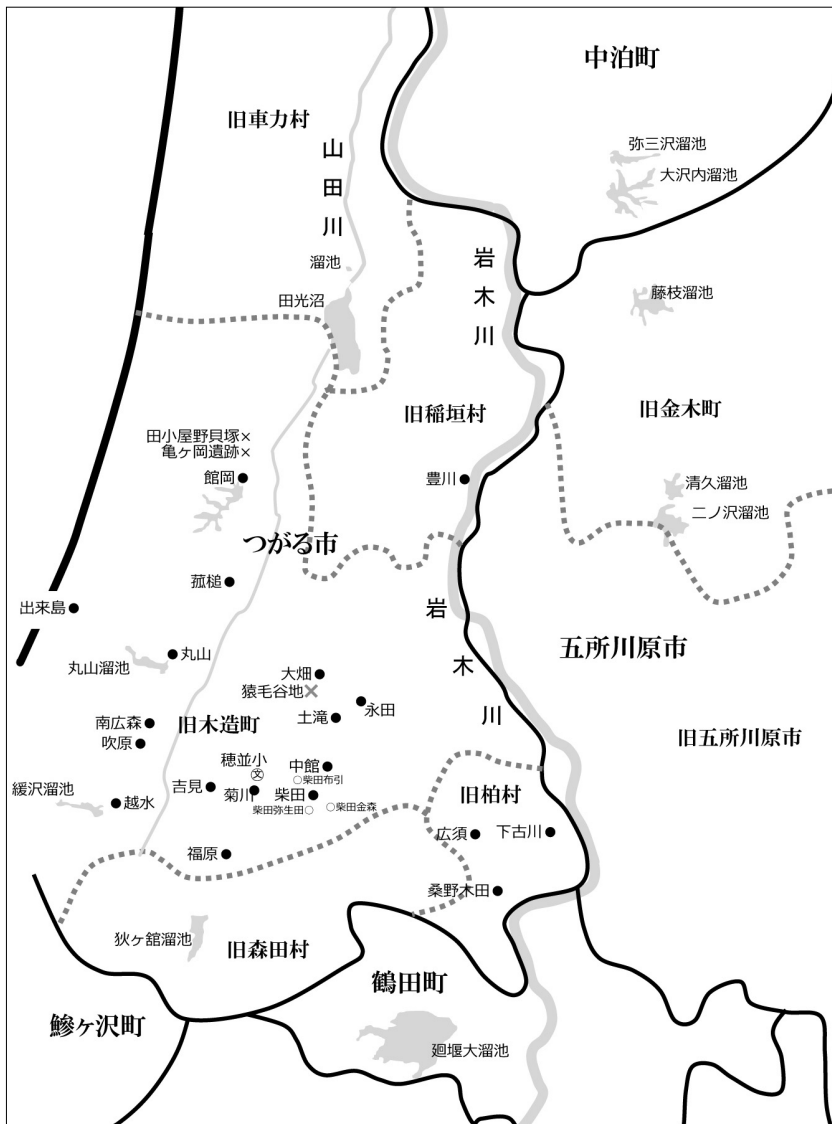


図1 地域略図

注) 本稿のなかにあらわれる集落名や溜池、河川を中心に記した。実線は現在の市町村境を示す。破線は2005(平成17)年の合併前の市町村境を示す。

3. 調査結果(データ)

(1)つがる市木造柴田

① A氏 昭和19年生(74歳) 男性

来歴 ▼昭和19年に当地で生まれた。

呼称 ▼サルケ、シバタジャラケ

使用年代 ▼A氏が中学生のころ、つまり昭和30年代なかばころまではサルケを採取していた。——「オラだば中学校どぎだば(サルケを)切ったごどある。」

定義・分布・質 ▼サルケには土混じりのものや植物の根ばかりのものなど、質に違いがあった。土混じりのものは良くないとされた。柴田集落周辺にはサルケが分布しているため、地盤が軟弱で墓石も傾いているという。——「ツヂ混じりやあまねとがや、いろいろあるだねな。それこそなてすだ、ヨシの根とが植物の根ばりだでばな。」「(客土したのは) たげなてがらだでばの。うう。こあたりもな。そうしたやづみなあたもの。うう、だでハガイシ、まあ、こどもあ土葬にしたはんでみな曲がっちゅうだずあ。下ピッドしてねえごどで下な。うう。だわけや。はい。」

入手法 ▼当地のサルケは「柴田ザラケ」と呼ばれ、良品として知られた。A家で売買した記憶はない。いっぽう、A氏の夫人の実家(森田村)では、かつてサルケを購入していたという。あるとき、A氏と夫人との間で、サルケのサイズが話題にのぼった。夫人のいうサイズは、A氏がイメージするものよりもかなり小さかった。「売り物だから小さかったのではないか(利益を増すために、小さめに拵えたサルケだったのではないか)と笑いあったという。——「したはんで、ムガシからしたんで『シバダジャラケ』てすあ、有名であたもんだあ。うん。」「(売買は)ウヂではやたごどありません。まあ、あたがもわがねばてな。」「えのカガだきや森田だはんで買ったもんだってしゃべてらよ。買ただど。それで、サルケすすあ、こたサルケだってしたわけや。ワしたはんで、買ったサルケだはんでちせでねな、って(笑)。」「したて、カガどご買たてらだ。あづのほだばねえもんだもな。」「どこから買ったかは不明。ケッキヨグムガシだばしたて売った人もあたでばな。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼春先、3月ころの雪が消えた天気の良い日に、集落から北へ3kmほどの馬の草刈り場から掘った。春とはいえまだ肌寒く、湿地の水に浸かりながらのサルケ切りはつらい仕事だったので、酒を飲み、体を温めながら作業をした。そのため飲み過ぎて酔っ払ってしまうこともしばしばあった。採取は父親が中心になり、中学生だったA氏も手伝った。——「とにかくそのサルケ切るのは春一番の仕事。うう、三月のユギ消えてまでさ、天気な。んだきやムガシの人、なてあてそさはねあまねもんだしさなしゃこいし、うう、まづおどなでもこだであしゃこいどごでこだサゲ飲むでばな、酔てまでこだ(笑)」「(A氏が中学生のころ)ウヂのチヂオヤ切ってまだ何だばあ



採取場所は、田より一段低くなっている

の、フォークだでばな。アレでこう、やったごどあるけども。フォークだのアレでこうやってしてさ。うん。(切るのは)春先だな。や、したんで田んぼさはる(入る)前にさ。うん。こう天気いいしな。うん。あのしたんで何てすだそのウヂのうしろのや、うしろの人ま誰だかも切ったでばの。うん。がらも切ったわけや。今、やったのはなんてすば、こっから北側に3kmぐれえあの、それこそ何てすだば馬の草刈る、草刈り場あったねな、そのどごしたした、にサルケあてオラこう歩いてでもブヨブヨブヨて、まはえぐさべればムガシからヨシとかな、だいず(そのようなもの)なつたずあるだいな。うん。」「切るのはオドゴ。ワのチヂオヤ切ただね。」

採取法 ▼草の根と土が混じった表層部は取り捨て、その下のサルケをおよそ縦横1尺四方、厚さ5寸ほどの大きさに掘り採った。4~5段ほど掘ったので、その深さは5尺ほどになった。採取には長短2種類のテンズキとサルケ用に特化したカマを使った(次頁写真)。まず、柄の長いテンズキで垂直方向に切り込みを入れる。次に、柄の短いテンズキで横から切り込みを入れた。そしてある程度の範囲の切り込みが終わると、フォーク状の道具で上に上げた。基本的にはこれで一枚のサルケ(1尺×1尺×5寸)が採れるが、「形が不揃いな場合」「気に入らない場合」には、更にサルケ専用のカマで断面を成形した(図2)。同集落の他家では横切りは足先を入れて折り取るような方法を用いているが、A家では横切りもテンズキを用い、更にカマで成形するという念の入れようから考えると、自家消費用として以外に、商品としての

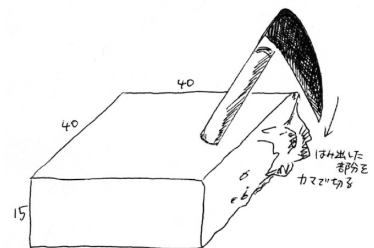


図2



サルケ切りの道具 A氏所蔵

- A テンズギ（長） L1020 W200 (mm)
- B テンズギ（短） L694 W200 (mm)
- C カマ L240 W250 刃渡220 刃巾60 (mm)

採取も念頭にあったのではないだろうか。A氏は謙遜して「仕事下手だったからカマも必要だったのではないか」と語るが、同集落では他家でもカマを用いていた家があることから、カマを用いたのはA家だけの特例ではなく、「柴田サルケ」という商品を産出した地ならではの丁寧な配慮だったと思われる。サルケ専用のカマ（写真下）は、刃先から峰までべったりとして幅が広く、たわみが付けられておらずまったくの平面である。まさにサルケを直線的に裁断する目的に適った形をしている。A氏は、道具を懐かしそうに手に取りながら、これは自分が父親と一緒に使った道具であったこと、中学生になると手伝わされ、春先のまだ冷たい水に浸かりながらの作業は億劫だったことなどを語ってくださった。——「ワそれ中学校どぎ、ワ今73だばって、中学校のどぎだばそれこだ何てすだば、まあ、ずっとこう切るでばな。ばあの、たげこのくれまで切ればこう、上さまずよごこうさスコップでこえてさ、あスコップでね、あの、フォークでこえて、で持ててこさ持ててこう、パタパタどこう、こえて置いだもんだでばな。ブロクみたに切たやづな。うん。（切る深さは）5尺ぐらい。でツヂまじりやあまねとがや、いろいろあるだねな。それこそなてすだ、ヨシの根とが植物の根ばりだでばな。ま、大体こたもでねな（一尺四方くらい）。厚さしてまずこれくれ（5寸くらい）だでばな。目分量だどごでな。うん。きたドグ（道具）みだどごあるな？おお、せばあべ。（掘る深さは）大体、4段が5段ぐれえだでばな。ちゃんとしたやづだあわがねでばな（必ずこうだ、と決まっているわけではない）。うん。たんで、

その層ってあるわけやな。（表層部は）だめだやづあるでばな。したんで草のソゴあたりだばこう採ってしさな、ホントはしたんで何てすだば草の根とかそういう堆積物がこうあって、ツヂ混じりやまいんだでばな。

（道具を示して）おお、これだ。これ二つ使うんだ。（カナベラは）つかわね。上のほづスコップでやったづぎだばどんだがわがね。（カマを示し）これだね、これ特別、サルケ用につくた。普通カマはこなちゅもだでばな。たで、はぐさべれば、こうまず（サルケが）あるでばな。でこれ（柄の長いテンズギ）でこう、こうやる（垂直方向に切る）でばな。だいたい、それでこんだこう（柄の短いテンズギで）、ヨゴさやた（横方向に切り込みを入れた）でばの。してこだ、ちょとこうまねばこれ（サルケ用のカマ）でしさな、こう切たりしたもだでばの。ヨゴに。（ちょとまねば、というのは）あの、形不揃いだばしさ、大体こうしさな、気にくわねばこう、やたりしたもんだあでばな。だんで、な、こたカマて見だどごねふたらとしたな、カマ普通、こう、たまちゅだでばな。うん。これしたはんで特別してつぐらへじゅうだでばな。（道具を示して）こったったもんだあでばな。うん。（道具の名称は）わがね。は一て。はてわがね。それでももと年いたふとだばわがるがもわがね。うん。ま、よぐあったな。これや。はい。ふつうガパどなげでまるはんで。うん。（カマ形の道具を使うのは）したんで不揃いなるどぎだばしさな。うん。」（サルケ専用のカマを使うのは）シゴドへだであったがもわがねあな（笑）。普通こたカマて見だどごねきや。な、まっすぐだでさ。うん。（当時は）サルケ切るづイヤでや。ま、ワだば切たどごねばてな。中学校どぎこだやらへられで。うん。はい。」（道具を示しながら）「これろう、ツヅオヤとておがながってしたどごでろ。」



サルケ切り用カマ A氏所蔵

乾燥・運搬・保管 ▼天気のよい春の日、掘り上げたサルケを一つ一つ適当に平置きをした。掘り上げてまもないサルケは柔らかくもろいので、平置きでなければならず、ハの字形に立てかけたりはしなかった。平置きにして乾かしている途中で誤って壊したときには『なしにやただば！』（何してるんだ）と叱られた。ある程度乾燥したのち、互い違いに隙間をあけるように4～5段のレンガ積みにした。中学生のA氏はその作業を渋々手伝った。頃合いをみて積み替え、乾燥をうながした。その後、最下段だけを残して荷車に積み、馬に曳かせて家へと運んだ。最下段のサルケは湿っているの、積み直して同じように乾燥させた。いつごろまで乾燥させたのかは覚えていない。家に運搬したのちは、小屋に保管した。こうして、1年焚く分のサルケを確保した。——「うん、したんで最初はや、まんずこうパタパタパタパタどこう、こえて積んであただでばな。まずその、こう例えばこからこうやるてばそごあたりさこう、1年分はやねあねどごでさ、はやぐさべれあこう、パタパタどこう、こやて、それオラダヂのシゴドであたわけやまずワァ中学校のどぎしさ、好きでねひてな。や、子どもの（役割）てよりもみなオドナでやるだでばなワァこん

だ、さ、天気いいば、春の乾燥した天気いいどぎやるわけだ。な、ひゃワ今度それ、あのほっこぐってしたの、ワ、交通事故でケガしたはんでその当時はまだケガしてねひえてあったどごで、で、パタパタパタどやるべえ。ひえ、ある程度こだ、乾げばこだしさな、こだあの、まはえぐさべれば、こやてまだこちゃこやて、何てしだば、積んでったもんだ。互い違いに。すぎまあげでな。で風通さへでしさな。(最初にパタパタと並べるのは) まあ適当だでばな。うん。ふとどおりずーとこうしさ、次まだずーとこう。ずーとこう。平置き。全部平置き。(よりかけたりは) しねずや。うん。やこいもんだもんな。最初だやこいもんだどごでさ。してこんだそれこんだろ、かしたり(壊したり) なんてりへやこだ叱らいたもんだでばな。『なしにやただば!』ってな。うん。(レンガのように積んだものは) したんでそのまま置いてたずや。ある程度乾げばこだしさ、こだこう積み直したりこう、だいたい4~5段、3~4段だでばの。う。やて。で、こだ天気いいしこんだその一番下だけのごして、上のほじこだえさもて来ただでばな。乾いだどごで。ひゃまだいぢばん下まだしめちゆでばな、それまだこえてしさな、うん。それで一番下だけな。まだ積み直して。うん。ほでねあその一番下のやづみなしみちゅきや。(だから下のものをまた積み直して干すという作業をおこなった。) うん。それ持て来たもんだでばな。」「それごそあの当時はマテでぢゅうどごで(サルケを家まで運ぶのは) 荷車だでばの。う。」「夏ごろもて来たがいつもて来たがワアそごまではピンとわがねとにがぐ乾いでがら、うう、つまりはあの、田植えしまつてがらだもわがねな。ちょとわがらね。わしでまでばな(昔のことだから忘れてしまうでしょう。)」(家に運搬したのは) うんムガシはあの、それごそなんつだば小屋さへでおいだもんだでばの。うん。(ニオ積みのような形は) おらほづだあそたやづねひえてあたいな。」

用途 ▼一坪もの広さがあるロブツ(囲炉)でサルケを焚いた。田植えときには作業で足が冷たくなるので、帰宅後に炉にあたる時は火床に足を入れて暖まった。「それごそなつだロブツだて、まず一坪、一坪ぐれあただでばな。うん。して、それさこだ田植えだのなればしさ、そのまま、な、あのこう、足ひぐいどごは、まはえぐさべれば火さあだんだでばな。まず、ただおつきいきや。ひゃまんながさ火焚いでさ。こだこう足入れてこう、さびもの。足入れたりしたはんでろ。」

▼サルケの火は調理にも用いた。カギノハナにナベをつるし、炊事や汁物の調理をおこなった。魚や餅を焼いたりした。餅は灰に埋めて炙った。灰だらけになってしまい、払ってもジャリジャリという食感があった。しかしそのようなことを気にしてられるような時代ではなかった。「昔はそれでみんなやった。それしかなかったから」とA氏は言う。——「したんでそれ、モチ食ったりした。モチやたり、それであのオツユやたり、ご飯炊ぐのもんであただでばな。でたげなたらこだあの、まだその別個にまだカマ、カマドな。べづにつくたばたて、それごそあのふつあのなてすだばあの、カギノハナてすだな、な、あれさナベでも何でも、それがらサガナでも食たもだでばな。な。みなやったもんだでばな。うん。それでやたづや。ムガシはしたてそれしかなひやてあたまだね。な。」「してこだ、そのどごさこだショウガツの餅だのて、まはえぐさべらあ(わかりやすく簡単に説明するなら)炙ったでばの。(灰に埋めたので)ガツパどアグつてまでそれこだこえて(払って)、ジャシジャシてすだねな。(だからといって)したやづかもてらいねえもだたいな。」

操作 ▼マキを一本置いてその上にサルケをのせて着火した。昔から「シバタジャラケ」(柴田さるけ)として知られるほど、当地のサルケは良質であったので、着火は容易だった。木の薄片に硫黄のついたマッチがわりの木(付け木)で着火した。——「したんでそれ木の、木の、まず植物の根っこだでばな。だんで良質なサルケはいっごまについだよ。うう、つぎやす。したはんで、ムガシからしたんで『シバダジャラケ』てすあ、有名であたまんだあ。うん。」「それさつけるやづだあ、はやぐさべればや、屋根さ打づマサ、これさあの、なんつだば硫黄つけであたまんだでばな。割ってな。つけであたまんだでばな。割ってな。うう。つけだりしたもだね。うう。はぐさべれあマツ(マッチ)がわりだでばな。うう。やたあね。」

副産物 ▼煙が大量に出て、座敷のハリや柱などに黒いススが一面についた。A氏が高校生のころ(昭和36~38年ころ)、学校へ着ていく白いワイシャツにも煙のために色が染みついてしまい、大変だったという。洗って落ちるものではなかった。また、ニオイもあった。親戚のいる鱈ヶ沢の山村を訪ねたとき、『あなたたちが来るとサルケくさい』と言われた。——「うう。えさへできてしてこだあのなてすだ、マギー本やてサルケのせで、何かこうけむてでばな。なあ、あの煙出るきや。てこんだあなんつだこたらのちゃガパどこうあの、なんつだ、あの家のや、ジャシギのこたどごちゃガパどこう、くれのこだなつだ、つてまだでばな、煙。へあこだオラあの高等学校さ行ぐとぎそれさこだ、しれえワイシャツさそれだけあだるたきやなも色つてまてうだでひゃたもだねな。(色は)落ちね落ちね。」「(ニオイは)したたべねな。」(以下の一文は2017年11月28日取材時の証言)「鱈ヶ沢のあの、山のほじだばてや、『などくりやこれサルケくせ』ってしてろう、遊びに行ったどぎ。」

その他 ▼ヤシキダからサルケを切った。切った跡地のことを『キリパ』と呼んだ。落ちるととても深かった。現在も柴田の地域内に低くなっている場所があるが、サルケを切った名残である。キリパにはジャコ(小魚)がいたが、何故か骨が硬く、『キリパから採れる小魚なら食えない』と祖母が言っていた。そこで小魚は焼干しにして出汁をと

った。大きなサイズであれば、焼いて食べた。——「う。だで、そごでも（まさにこの近くでも）とただよ。う。ま
 ずこの、ま、ワダヂは普通ヤシキダヤシキダちゅうばて、うん。柴田は柴田で、柴田ジャラケで有名だたあでばな。
 うう。サルケ採れるてな。こごあだりがらもとたわけや。したんで低いきゃ。うん。で、採ってあどなげでおいでこ
 だ最後はツヅふいだばてな。うん。そごにもしたしたんでキリパあたわけやキリパてそれごそサルケ切るとごあキリ
 パてしたな。うう。キリパてしたもんだんだ。ま、方言だでばの。キリパキリパてしたわけや。ふたどごにもあたわ
 げや。うう。して落ちればほんとにふげしてあただね。うう。で、こだなんつだば、フナもまずいであったあでばの。
 だてムガシはあのさそういうやつも食べだもんだでばな。したんでそのキリパがらなひてだあわがねけどもキリパが
 ら獲れる、釣ってきた、まあワダヂは普通ジャコジャコてしだばてな。フナフナてさねジャコジャコてし。キリパが
 らとてきたジャコだばよなもかれねて、あのしあ、オエのばちやだのだあしたわけや。というのは、骨がかでひてま
 ねわけや、なひてだあ骨かえわけや。だどごでそれごこだ焼いでこだあ何がかんがのダシにしたもんだでばな。
 うう、ダシにしたわけや。うう、ほでねあおつきいやづはみな食べだもんだでばな。うう。うう。こごあだりあみな
 ほどあたもんだでばな。ひぐいきゃ。うう。」（2016年8月27日取材）

② B氏 昭和10年生(83歳) 男性

来歴 ▼当地で生まれ育った。昭和30年代前半に、A氏の父親のサルケ切りを手伝った経験がある。——「直接つか
 ねばて、こごのおとさん、ツヅオヤが、やってあたんでえ。むがしあの、サルケ切ったもんだつきゃ。それでいま助
 手にしてすさあ、テモドとしてそばにいで切たでばな。そして切ってし、むがしそひて焚いだもんだつきゃ。」

呼称 ▼B氏自身は「サルケ」と発音する。B氏の父親もそのように発音していたという。「サラケ」と発音する人
 もおり、「シバタジャラケ」という呼称についても聞いたことがあるという。——「サルケて、ザイ、地方の人だば、
 サルケてす人もあしサラケてす人もある。（自分自身は）やはり親のアレしゃべちゅうず見ればサルケだでばの。サル
 ケサルケて。」「（シバタジャラケという名称を聞いたことも）ある。うん。どかでも出るとごで下見ればろ。」

使用年代 ▼B氏がA氏の父親のサルケ切りを手伝ったのは、20代前半、つまり昭和30年代前半であった。その当時、
 自宅でもサルケを使用していた。——「（A氏の父親の手伝いをして）アレ、サルケきたあどキリパや、あこに西に
 あてただね。わんかだそれいつにあてたね。まず20、22～3のあだりでねが。」「（A氏の父の手伝いをしたころ、B
 氏の家でもサルケを）使てあた。」

定義・分布・質 ▼サルケとは、「草の根が密になったようなもの」である。家屋の敷地内に産出するサルケを「ヤ
 シギサルケ」（屋敷サルケ）といい、重量感があり堅くしまっていて、火持ちがよく、よい灰が残った（ちなみに、
 屋敷地内をからサルケを掘ったあとに家を建てた人がいるが、サルケがなくなって低くなった分、水がたまりやすくな
 った）。いっぽう、ヤヂに産出するサルケはネッコ（繊維質）ばかりで、ボソボソとして軟らかく軽い。すぐに燃
 え尽きてしまった。前者がよいサルケだとされ、「全然モノが違う」つまり明らかに質的な違いがあるという。また、
 サルケを田から採る場合もあった。柴田周辺の地下は1mほど掘ればほとんどすべてサルケが分布しているとB氏は
 考えている。——「まず草の根つづまったえんたもんだねな」「（良いサルケと悪いサルケの）違いあるだず。やは
 りあの、土地のこの、サルケいらしんたいな。土地のながにあるず。例えばAさんのこの、敷地のそ、Aさんのそ
 ごにあたの、サルケきたあど。して、キリッパだだ。あこにな。そごのサルケど、ヤヂの向ごうの、今のヤヂだでば
 の。サルケ違（ちが）てあただ。こちのサルケもでして（重たくて）や。しまてあたね。あちのず、こして軽（かる）
 してや。したてやわかふてあたね。ネッコばり（草の根のような繊維質ばかり）だべおん。したんで火焚いでも、
 あちのずいつに燃えてまるわけや。うん。こちのずこんだ、あの、炭焼ぐんだだけだ、灰ながながなつてもごねで
 き。いい灰のごるわけだであな。（サルケも）かええずど、（軟らかいものがあり）、やはりじぶのとつ（土地）のど
 ごいだのかでえね。ワア（B氏の）ジッコきたのずわんか手伝ったごどあるだね。こごだり切たずなんぼでもあたん
 だよ。うん。（だからこのあたりは低く）こうなてるんだいな。だでウヂ建でもら、××（個人名）のウヂ建つた
 ず、基礎やねでずば一とふいだ（布基礎ではなくベタ基礎にした）あどや、なんだこごあむっちゃでねな（なん
 だ、どこか水が漏れてるのでないか）てしゃべてな、へてなんも知らねですさ、なもサルケらねふて水溜てまちゆだ
 ね（サルケがなくなった分低くなって水が溜まってしまってるんですよ）、てな。水ふいだだど（水が増えたんだそ
 うだよ）。ほほ。へやこのとり（通り）でもや、こだねこたらになちゆだね。見せるあこだぜひ、ウヂへこだ。たん
 でムガシや、今だけに排水悪いとぎだどごで、いがれば、水害なれば、そごちやばり大変だつて。こう来て。そごで
 ワラハドあどごでくちはでわんじゃにこいであるてたね（その水たまりを子どもたちが靴を履いてわざわざ漕いで歩
 いてあそんでいましたよ。」「オラにしゃべらへれば、屋敷だば『ヤシギサルケ』つてしたもんだけども、むごだば
 原野だどごでな。何サルケてナメはわがねな（笑）。ムガシから（その呼び方は）あたの。きだごとあるい（笑）。
 全然違うね。そのモノが。」「田がらもとたふと当時あるだ。田んぼがら。うん。田がらとたふと……、あこのヤヂ
 のほがらな。あつがらばりくばてきたな。マで。（正確なところは）わがねばてな。たでこうボソボソどすだね。む